

1. 業務委託名:久能石垣イチゴ狩りにおける通年型観光の事業可能性調査

2. 受託団体名:中心団体:いちごランドマサミ(川島正巳)

連携団体:東海大学海洋学部 新田時也専任講師

連携団体:さくら交通株式会社

3. 研究成果概要:

1. はじめに ---産学共同研究事業の目的---

久能石垣イチゴ狩り(以下、イチゴ狩り)は、静岡市の体験型農業観光の中でも、最も代表的な観光事業であり、市内外から多くの観光客が訪れている。

イチゴ狩りは、冬から春に限定されている観光事業であるので、この地域への観光客の訪れは、一年の内でも、わずかな期間である。現状のイチゴ狩りは時期限定であり、そのため、イチゴ狩りのシーズンを外れると、この地域での人通りは閑散となり、この時期を利用して、観光農園では、次期のイチゴシーズンに対応すべく、夏から秋にかけて、イチゴ苗の生育作業を行っている。

このような時期限定での観光事業であっても、シーズンのオフ期には、イチゴの加工製品の販売等で、年間を通しての観光農園の収入は、比較的安定と思われるが、しかしながら、それは、絶対的に安定した高収入とは言いがたい。かつ、限られた時期のみに観光客が集中することは、逆に言えば、シーズンオフ期の閑散期には、この地域の経済活性化が見込めないことになり、いわゆる、シャッター通り、と同じく、地域の元気力や躍動力が沈滞しがちである。現実には、この地域では、若い労働力の不足が目立ち始めており、農園主の多くは、中高年者である。

地域の元気力、躍動力が沈滞している背景には、常時、この地域に人口の流動がないため、この地域に住まう人の大部分が、外部との接触の機会に恵まれず、いわゆる、保守的な考えで、生活の変化をあまり好まない生き方に陥っているように思われる。

すなわち、地域の経済活性化、元気力、躍動力を高めるためには、この地域に、大きな人口の流れを作り出す必要があることになる。

そこで、昨今、体験型の観光事業が全国的なブームとなっているが、この方式を、現状のイチゴ狩りに取り入れ、つまり、晩夏から早秋にかけて農園主が行っている石垣イチゴ苗の定植を観光客に体験してもらい、かつ、イチゴ狩りのシーズンが終わりかけた晩春に、イチゴジャム作りをも体験できるような観光プログラムを企画して観光客に提供すれば、通年型のイチゴ狩りが実現できる。それは、一年を通じて、この地域に観光客が訪れるということにつながるのだから、この地域の、経済活性化、元気力、躍動力を高めることになり、このような観光事業が成功すれば、ひいては、若い労働力の回帰や後継者問題の解消、などにつながるのではないだろうか。

以上の問題意識の下で、当該事業は、イチゴ狩りの通年型観光事業の可能性を調査すべく、「いちごランドマサミ」の川島正巳農園主を代表として、東海大学海洋学部の新田時也講師、袋井市の観光バス会社である「さくら交通」の三者が共同して取り組んだものである。

2. 事業の概要

通年型の観光事業としてイチゴ狩りを開発できれば、常時、人口の流れが、この地域にできるので、いろいろな意味で、地域の活性化につながるであろう、というのが、三者の共同事業の問題意識であり、共同事業の目的は、通年型のイチゴ狩り観光として、夏から秋にかけてのイチゴ苗の定植体験、そして、生育した後に、再度、摘み取り、ジャム作りに訪れてもらうプログラムを想定したのだが、果たして、このようなプログラムは、観光客の潜在的なニーズに合致し、可能性があるのだろうか、また、可能性があるとするれば、このようなプログラムを行って行くに当たっての技術上の問題点は、どこにあるのであろうか、ということを検証するところにある。

そこで、本事業では、体験モニターを募り、定植体験、イチゴ狩り、および、ジャム作りの一連のプログラムに招き、彼らへのアンケート調査を通して「生の声」を直接に聞くことで、検証を行うこととした。モニターが体験する場としては、定植体験用の農園地が確保されていた川島氏の農園を利用することにした。

モニターの受入れのスケジュールについては、9月の晩夏から早秋の時期に、静岡西部を中心として、30名程度のモニターを受け入れ、実際に、川島農園で、イチゴ苗の定植体験を経験してもらう。そして、生育したころの、翌年の1月に、再度、モニターとして招待し、イチゴの摘み取りとジャム作りを体験してもらう。その毎回ごとに、体験時の印象や感想、意見などを、アンケート形式で回答をしてもらい、これら2回のモニターの回答を下に、イチゴ狩りの通年型観光事業は、可能性があるかどうか、そして、可能性があるとするれば、さらに、どのような点に、問題があるのか、解決すべき点はどこにあるのか、などを検証することにする。

3. 研究結果および成果

平成18年9月23日、計画通りに、第1回のモニターの誘致が行われた。モニターの総数は、およそ40名程度となった。

定植の方法は、あまりに簡単で、かつ、ポットから引き抜いたり、石垣の穴に入れて、土を寄せて固定したりすることが、モニターの方々にとっては、はじめてで、面白かった様子に思えた。定植体験後、続いて、苗植えの体験を行った。苗植えをしたイチゴは、自宅にもって帰ることができるので、イチゴの苗が、どのように実を結んでいくのかを、リアルタイムに観察できるものである。また、自宅にもって帰った苗の生育と、次回の摘み取りに来た時に、自分たちが定植した苗とが、どの程度、成育に違いが出るのか、などを比較することも、この体験のねらいである。

今回の定植や苗植えの体験を行って、どのような印象や感覚、意見を持ったのか、その回答の代表例を、次に、箇条書きにて記す。「静岡市外」というのは、静岡西部に住まう人、のことである。

- 「子供が大変よろこんでいた。」(静岡市外, 男性, 60代)
- 「新たな発見, 植えることの楽しさが分かった。」(静岡市外, 男性, 30代)
- 「効率的な定植方法に感動した。」(静岡市外, 男性, 50代)
- 「イチゴについての認識を深めた。」(静岡市外, 男性, 50代)
- 「親子づれならさらに楽しめる。」(静岡市外, 女性, 30代)
- 「達成感があった。」(静岡市外, 女性, 40代)

というように、どれも、今回の定植体験について、大きな感動と喜びを表す回答であった。続けて、意見や要望としては、

- 「育成方法を説明したシオリ等を配布してほしい。」(静岡市外, 男性, 50代)
- 「メールでイチゴの育ち具合の写真を送ってほしい。」(静岡市外, 女性, 30代)
- 「苗植え体験で、自宅に持って帰ったイチゴ苗のその後の育て方を時期的に教えてもらいたい。質問したら、答えが、HP上かメールで教えてもらいたい。」(静岡市外, 女性, 40代)
- 「生育ニュースを写真つきでもらいたい。」(静岡市外, 女性, 50代)

というように、イチゴの生育についての要望が、とても多く寄せられた。ネットやメールでの配信、パンフレットの作成など、定植体験を実際に事業として行うに当たっては、このあたりのサービスを、かなり充実させる必要があることが感じ取られた。

また、さらに踏み込んだ意見としては、

- 「(定植体験が、あまりにも簡単であったので)定植までの苦勞が読み取れない。」(静岡市外, 男性, 60代)
- 「他の果実でも、同様の計画を立てればいい。」(静岡市外, 男性, 60代)

と、言ったように、観光客は、お仕着せの体験ではなく、いわゆる、本物の体験、を、望んでいることが伺われ、さらに、発展的に、このような農業体験型の観光事業を広げてもらいたいというように、モニターの側の知的好奇心を揺さぶった形となった。

以上のように、9月の定植体験でのモニター誘致は成功に終わり、かつ、有意義な回答も得ることができた。そして、3ヵ月後、ふたたび、モニターを、今度は、イチゴの摘み取りとジャム作りの体験に誘致することになる。

定植に引き続き、自分たちで植えたイチゴを摘み取り、食し、そして、ジャムにして持ち帰るというようなコースを堪能したモニターの方々に、聞き取りを行った。その聞き取りの結果、大多数というか、すべてが、今回の、この2つの体験を、とても喜び、すばらしい、との感想をもたれている。

4. まとめ—期待できる地域への波及効果—

以上、委託を受けて、定植体験や摘み取り、ジャム作りを通した通年型体験農業観光、とくに、イチゴ狩りでの可能性について、その目的と、調査、分析について述べてきた。結論から述べれば、体験型農業観光に対しての潜在的なニーズは大きく、とても魅力的なものであるので、観光客にも受け入れられるはずであり、かつ、事業を展開する上での技術的な運営についても、今回のモニターを通した実験で経験をしたので、この事業の可能性は十分にある、と思われる。本事業の代表者である川島氏も、静岡放送のテレビ取材に応じて、この事業が、来年度から本格的に実現すれば、地域の経済活性化、後継者問題などにも大きく寄与することになるだろうし、そのためにも、今回のモニター誘致で培ったノウハウを活かして行きたい、と述べている。なお、今回の事業は、多くのマスコミに取り上げられた。このことからしても、今回の事業への関心が、巷に大きかったことが見て取れる。

このような農業体験の観光は、ただ、地域の経済活性化に寄与するだけではなく、「命・いのち」

ある植物を定植し、そして、その実を食するということで、自然学習というだけではなく、こころの教育、人倫教育、などにつながるだろうと考える。その意味では、このような農業体験型の観光は、小中学生の総合学習の一環として、道徳、社会化の授業の教材として活用をしていただきたいし、高齢者のこころのケア、生きがいの実現、としても、活用をしていただきたいと考える。いきいき・はつらつとして、元気に、健康に余生を過ごすためにも、屋外に出て、動植物に触れる、ということは、とてもすばらしく、効果的であろうと考える。そのためにも、車イスが入り込める、いわゆる、観光のバリアフリー、が実現されれば、なお、すばらしいことである。

地域への経済効果、という面で言えば、このような通年型の観光が実現すれば、少なくとも、年に2回、のリピーターが見込まれるし、5月にジャム作りでリピーターということであれば、3回が見込まれる。つまり、地域への経済波及の機会が、年に、2から3回、ということになり、地域にとっては、好ましいことであろう。

ただし、実際問題として、イチゴ狩りの体験型観光のみで、年に2から3回のリピーターが見込めるとは、少々、思えない。そのためには、これまでのイチゴ狩りのイメージを刷新することになる、あらたな観光事業が実現すれば、さらに、久能石垣イチゴの名声は高まり、通年をとおしてのリピーター観光客の持続的な誘致が見込まれる。すなわち、例えば、夏には、久能石垣イチゴの定植体験と三保真崎海岸でのマリンスポーツ、秋には、やはり、定植体験と久能山東照宮、日本平の散策を組み合わせるといように、広域的な観光が可能となり、伊豆周辺で行われているイチゴ狩りとの差別化を積極的に図ることで、久能周辺地域への経済波及が、大きなものとなることが期待される。かつ、この新規事業が久能で成功すれば、後継者問題が深刻に進む久能の観光イチゴ農園主にも朗報となるであろうことも、期待されることである。

最後に、定植(労働)に始まり、その果実(所得)を得、さらにジャム作りにより、その得られた果実に付加価値を生じさせるという一連の体験観光を提供することで、都会に生活する観光客の方々に、忘れかけている「生きる」という営みを思い起こしてもらいたいと希望している。すなわち、定植体験は、「食育」のひとつである食を自らが育てる楽しさの実感、勤労の尊さやありがたさの再認識にもつながると考えている。

今回、得られたアンケート結果やその分析結果は、久能農協を通して、観光イチゴ農園主の方々との間で共有をし、これらを基礎データとして、さらなる地域の課題の解決に結び付けて行きたいものである。

以上